

## 訪 ソ 旅 行 メ モ (1)

竹 中 規 雄

## ま え が き

筆者は昨年7月から8月にかけて、訪ソ工作機械工業視察団に参加して、ソ連内各地の主として工作機械工場を3週間にわたって視察する機会を得た。専門的な事柄は別に報告したので、ここには旅行のあらましと各地の印象などについて述べてみたい。ソ連内の日程は、われわれが東京でソ連大使館を通じて申出ておいた希望をもとにして、ソ連側で朝から夜中まで少しのすきもなく立てられていたが、モスクワ到着後の打合せで多少変更、追加をしてもらったところもある。もちろん工場、研究所の見学ばかりではなく、観劇、遊覧などいたれり尽せりの接待を受けた。全般的に予期に反して非常に開放的で、街での写真撮影はもとより、工場内での撮影も大部分の工場では自由に撮らせてくれた。ただ筆者はロシア語ができないために、工場の技術者や町の住民たちと話し合うことができなかったのは誠に残念であり、ここに記す事柄も直接見たことのほかは大部分通訳を介して聞いたものである。もっとも、工場には英語あるいはドイツ語を話す技術者がごく少数ではあるがいたので、専門的な事柄は不十分ながらある程度は了解できた。

## ジェット旅客機

ソ連との直接の航空路が開設されていないので、一行はインド回りの旅客機でスイスのチューリッヒまで行き、そこからチェコスロバキヤ航空会社の双発旅客機でプラークまで飛んで同地に一泊した。7月13日である。ホテルは飛行場に近いうズィーネ町にあるトランシット・ホテルで、航空機による通過客のみが宿泊する極めて粗末なものであり、部屋数は2人部屋が10室ぐらゐの3階建てで、ボイラが故障したとかで湯も出なくていささか閉口したが、夕食にはビルゼンのビールが1本ずつつき、なかなか愉快だった。筆者は異国に来て緊張しすぎたせいか、飛行場のビルの玄関に手提鞆を置き忘れたので、このホテルの支配人兼給仕が英語を話すのでこれに依頼したところ、直ちに電話で連絡してくれて、ホテ

ルまで届けてくれたのは非常に嬉しくもあり、感心させられた。イタリーなどでは荷物を手から離してはいけないと注意されてきたのに比べて、共産圏では犯罪が少ないということをまず見せられたのである。夕食後付近を散歩したが、プラークの郊外であろうが非常に閑静で寂しい町である。白樺が美しく茂り、また柳の大木が暗い蔭をつくり、家並のはずれからは広々とした麦畠が続き、一方には昔の領主の狩場だったという森や山があり、何か伝説のようなものがありそうなところである。

翌日は午前中は市電でプラークの繁華街へ行き、デパートや商店を見て回った。プラークは落ち着いた古い都であるが、ソ連の首脳が来訪するとかで、各ビルは大小の赤旗で飾られていた。郊外には高層アパートがどんどん建設されている。

ホテルで遅い昼食の後、バスで飛行場へ行き、ソ連の航空会社エーロフロットの双発のジェット旅客機 Tu-104 でモスクワへ向かった。われわれの乗った Tu-104 の写真を第1図に、内部の座席配置を第2図に示す。出



第 1 図



## Место №.....

第 2 図

発前に雷雨があり予定時刻を25分遅れて17.05に出発した。上昇速度が早いので耳が痛い、振動や騒音は

1) マシナリー、昭和33年1月号別冊付録

案外少なく非常に快適である。テーブルを隔てて2脚ずつ向き合っているソファに座る。上等のソファであるがいずれもシート・ベルトがないのには驚いた。約30分で高度10,000mに達し950km/hrの速度で一路モスクワへ向かう。雲はすべて足下のはるか下方で、太陽の光が強く目に痛い。各座席に酸素吸入の設備があるが、気分はよくわれわれ一行は全然使用する必要を感じなかった。スチュワーデスが3人勤務していたが、1名は英語を話すので都合がよかった。機上からの写真撮影は一切禁止された。最後部の手洗所に行くと、さすがに振動および騒音が激しい。

機上で夕食の後、2時間30分飛んでモスクワ郊外のフヌーコヴォ空港に到着、時差が2時間あるので23.30<sup>0</sup>である。

空港には首席接待員のグレチュエーヒン氏（モスクワ地方国民経済会議議長顧問）はじめ数名の方が出迎えにこられ、入国手続（一切ソ連側でやってくれたがかなり時間がかかった）の後、大型乗用車を連ねてホテルに向かった。空港と市内を結ぶ道路は道幅も広く、舗装も良好で、闇を貫いて飛ばすうちに、やがて前方にモスクワ大学の高い建物が見えて来て市内に入り、われわれの宿舎に用意されたレーニングラード・ホテルに着いた。このホテルは第3図のような堂々たるもので、調度もどし



第 3 図

りした落ち着いたものを備えている。食堂で夕食ののち翌日の打合せをして就寝した。

#### 工業博覧会

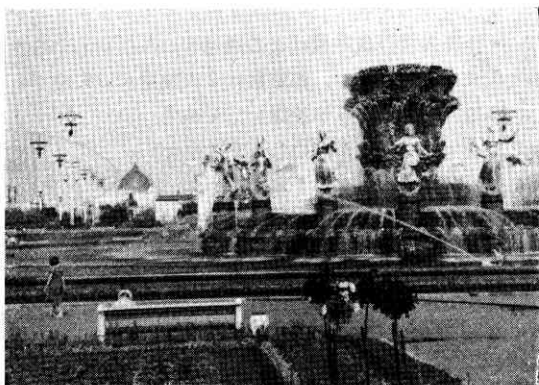
翌日、すなわち7月15日は、9時にホテルで朝食ののち、モスクワ地方国民経済会議の事務所に、われわれを招待してくれた責任者の、同会議議長コストウソフ

氏（前工作機械工具省大臣）を訪ね挨拶と日程の打合せを行い、同所に用意されていた歓迎レセプションに出席した。キャピヤ、イクラ、ハム、サラダなどをテーブルに一杯ならべ、ウオッカ、コニャックなどを盛んにすすめる。なかなかの馳走である。その日の午後直ちに工場を1ヶ所見学したが、翌日はソ連工業を概観するために、有名な産業博覧会の中にある工業博覧会を見に行った。

産業博覧会は常設のもので、500エーカー（約60万坪）の敷地に各自治州ごとに大きなそれぞれ特色のある建築様式の展示館があるのであるが、その中央部に機械製造館を中心として21の展示館をもつ工業博覧会が常設されている。ソ連内各地をはじめ全世界からの訪問者が絶えないとのことで、われわれの行った折にも田舎から出て来たような若い人達などで賑わっていた。非常に高い正門を通り中央の大通りをしばらく行くと10月革命館があり、革命に関連した絵画などで飾られている。第4図はその内部の正面である。第5図にこの館を通りぬけた所にある噴水および展示館の1部を示す。このように場内到处に花壇や噴水が設けられ、道路もきれいに手入れが行き届いている。第5図の左側の円屋根が機械製造館である。同館の内部にはジーゼル機関、トラクタ、自動車、鍛圧機械その他種々の工業製品が展示しており、ソ連の工業力を誇示している。内部の1部を第6



第 4 図



第 5 図



第 6 図

図に示す。

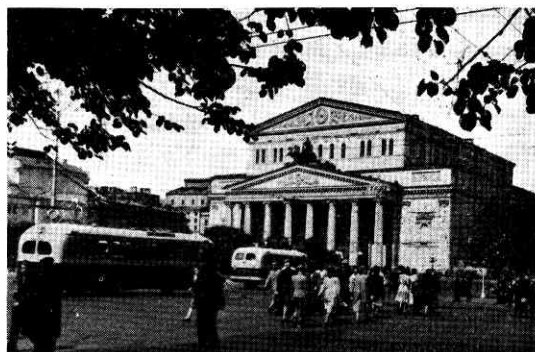
この建物の向かって右側に工作機械館があり、種々の工作機械、測定機および工具などを展示しかつ作業を実演して見せている。機械は全部最新型のもので、説明者も自信をもって説明している。一般の工業知識を高めるためにも、このような常設の博覧会をわが国にも持ちたいものと痛感した。このほか科学アカデミー館、原子力平和利用館などがある。

機械製造館の裏には大きな池を隔ててレストランがあり、多勢の訪問者（ソ連人ももちろん）が利用している。またこの博覧会の敷地内をきれいなトロリー・バス（運転手は女性）が走り一般の利用に供している。

### モスクワにて

昼間は研究所や工場の見学で忙しかったが、夜はまた種々の楽しい行事でやはり忙しい日が続いた。17日には18.00にホテルに帰り、19.00にボリショイ劇場の付属劇場に行きオペラ「ファウスト」を観劇した。メフィストフェレス役の歌手が素晴らしく、満場の観客も熱狂的な拍手を送っていた。終演は23.30で、ホテルに帰って夕食をとるのである。われわれは遅くもあり疲れてもいるので直ぐに寝かせてもらいたいと思ったのであるが、接待員達は食事をしないと健康に悪いというので、親身に心配をして無理にも夕食を採らせられたのは有難くもあり閉口もした。このようなことはその後たびたび経験した。19日にはボリショイ劇場でバレエ「眠れる森の美女」を観た。これも非常に見事なもので、会話がなだけにバレエの理解の乏しい筆者にも十分楽しむことができた。両劇場共帝政時代を思わせる豪華な建物で、内部は金色の装飾が美しく、天井にはきらめく大シャンデリヤが輝き、また舞台装置もなかなか立派である。観客は工場、農場などの模範的勤労者たちで質素な身なりであるが皆熱心に観賞している。夏であるが冷房装置はないので非常に暑く、幕間には劇場建物内の喫茶店で冷たいものなどを飲み、また玄関から外に出て広場の噴水のほとりで涼をとったりしている。入場料は安い

由であるが、切符が手に入り難いとかで岡田嘉子さんなども時々新聞社の特派員の所へ貰いに来るような話も聞いた。第7図はボリショイ劇場の正面である。またある

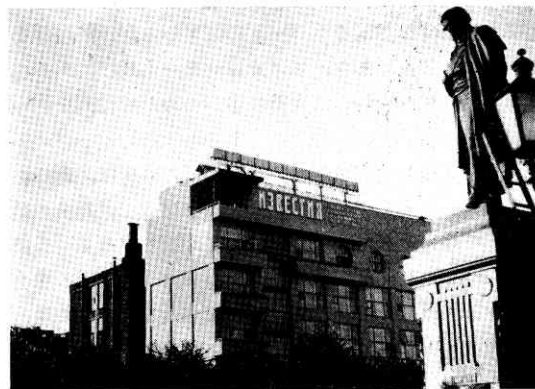


第 7 図

夜はサーカスに案内してくれたが、これは例の平和友好祭の参加番組の一つで、各国からの使節団が多勢見物に来ていた。

昼間の余暇にディナモ競技場でソ連対ブルガリヤのサッカー試合を見たが、大勢の観衆が熱狂的な応援をしている。ソ連では娯楽としてはスポーツと芸術のほかはないようで政府が非常に力瘤を入れているのが解る。いわゆる健全娯楽に徹底しているわけである。このために、ある午後に案内されたモスクワ大学のある丘の麓にあるレーニン競技場には10万人の観客席のある大スタジアムをはじめ、室内競技場、プールその他が広い敷地に立ちならび、斜面を利用してスキージャンプ用のジャンプツェまで設けられている。また日曜日にはトレチャコフ美術館を見学したが、熱心な若人達は行列をつくって入場の番を待っており、館内でも説明者の周りに大勢あつまって観賞していた。絵画は帝政時代からのものが良く保存されているが、近代のものでも写実風のものが多く、キリスト教関係の教会の絵画も古いものが多数展示されていた。

日程に自由時間とされている時を利用して、東大理工研の曾田教授、工学部の倉藤助教授、東京工大の益子助



第 8 図

教授と小生の大学関係の4名でNHKの吉川特派員に2度ばかり案内していただいてモスクワ市内を見物した。モスクワの道路は非常に広くて舗装も良く、諸所の広場には花壇や噴水があり、またプーシュキン、ゴーゴリなどの作家、詩人などの銅像も諸所に見られた。第8図はイズベスチャ編集局のある広場に立つプーシュキンの銅像である。市内には高い塔をもつ宏壮なビルディングが多く、また8階建ぐらいのアパートが立ち並び、なおどんどん建築中であるが、いずれも防寒を考えて窓が比較的小さく、クラシックな感じの建物である。デパートにも2ヶ所に入ったが、一つは赤い広場に沿った宮殿風の外観の細長い建物で(第9図)、2階建であるが中



第 9 図

央は天井まで吹き抜けになっており、その両側に多数の店が仕切られてあり、これに種々の商品別の売店がある。同じデパート内にも同種の商品の売店が2、3ヶ所あるものもあり、ラジオ、テレビなどから食料品、衣料品などをはじめ、中には10,000ルーブルもするミンク的外套を売っている毛皮店まである。物価はかなり高いようで、公定レートでは1ルーブルが90円であるが、旅行者レートの36円で換算しても日本より少し高いような感じがした。ただ書物とレコードなどは相当安いと思われた。もう一つは子供のデパートと称するもので、子供用品が主であるが一般の商品も売っている。4階建て売場の構造はわが国のデパートに似ているが、規模は中ぐらいのところであり、エスカレーターも設けてある。冬物衣料や靴の売場には大勢の客が詰めかけ行列を作っていた。

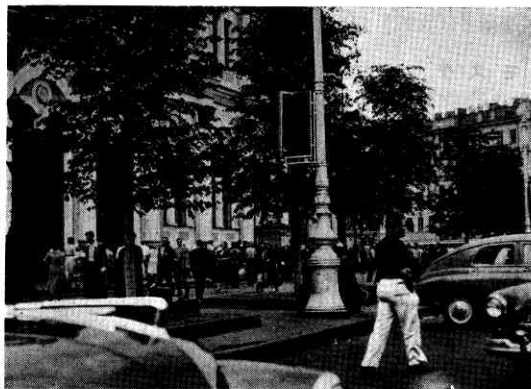
昼食をとった北京飯店という支那料理の店は、赤い柱に、天井には極彩色の装飾をした大きな店で、礼装の給仕がサービスをし、またモスクワ河に沿うゴリキー公園にあってこの河に浮かべた船の上のレストランでの夕食のひとつときは誠に愉快的思い出となった。これらの店にはソ連人も多勢入っており、ちょっと予想して来た共産圏とは思われないようであった。

このほかモスクワではクレムリン、モスクワ大学、レ

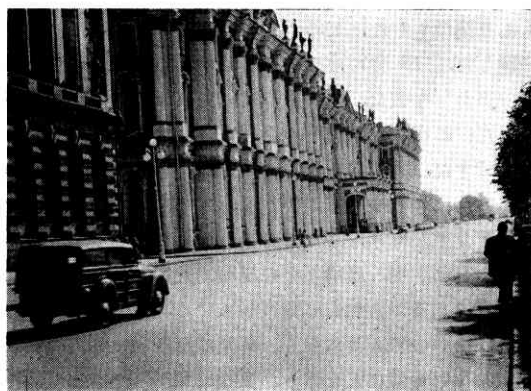
ーニンおよびスターリンの墓所などを訪れたが、これらは良く知られている所であるから省略する。

### レニングラードへ

われわれはモスクワに8日間滞在して、7月22日の夜“赤い矢”という急行列車でレニングラードへ向け出発した。蒸し暑い夜であったが、レニングラードスキ駅は種々な服装の旅行者で相当混雑しており、その中をかきわけてプラットフォームに出て、用意されていた寝台車に乗り込んだ。駅舎は案外汚なく、プラットフォームも粗末である。われわれの列車は蒸汽機関車が牽引しているが、プラットフォームの向う側には1,200馬力とかのジーゼル電気機関車が赤色の塗粧も美しく停っていた。寝台車はコンパートで向い合せに2台のベッドがあり、下段のみで天井が高く、スプリングもなかなか具合がよい。11.55に発車すると間もなく女給仕が紅茶とミネラルウォーターを運んで来た。各車輦に湯沸しがあり、給仕がいてサービスが良い。熟睡して翌朝目を覚ますと、列車は広漠たる原野を一路走り続けている。森あり原野ありの中にところどころに畠があり農家が点在していて、誠にうらやましい広さである。やがてレニングラードに到着、直ちに車でヨーロッパ・ホテルに行くこのホテルは古い建物であるが相当広く、筆者とK助教授



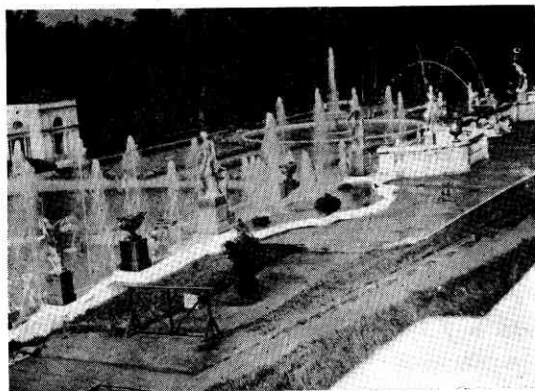
第 10 図



第 11 図

の割当てられたのは3室からなる豪勢な部屋で家具は帝政時代の様式のものでピアノも備えられていた。

レーニングラードは、学術の中心をもって任じている都で文化も高く落着いた町である。ここでは工場見学之余暇にピョートル大帝の冬の宮殿エルミタージュと郊外にある離宮を訪れた。エルミタージュは現在は美術館になっていて(第10図)ソ連の画家の絵画のほかにラファエル、ダヴィンチ、レンブラントなどの作品もあり、またソ連内唯一というミケランジェロの彫刻“かがめる少年”などもある。そのほか金、銀、宝石などやソ連内に出る種々の美しい色の石を用いて造った大小の壺、花瓶、卓など帝政時代の器物が保存され、一間には各種の色の45,000個の石のモザイクでソ連の地図が作られていた。ピョートル大帝の遺物も多く、日常使ったという書物机は高さが筆者の肩ぐらいまであり、非常に大男であったことが解る。また細工が好きであった由で、種々の簡単な工作機械などがあつたが、中に木製の旋盤で型板を用いて倣削りのできるものがあつて興味をひいた。入場料は3ルーブルの由、多勢の参観者が入っている。離宮の方は市内から自動車で約45分ぐらいの所にあり、フィンランド湾の入江に面し、広い庭園には大小の噴水があり、美しい森林が続き、市民の絶好な散策地になっている。市内からの道路はやはり相当の幅があり舗装も良く、自動車を飛ばすには快適である。また市電も近くま



第 12 図

で通じており、途中で見た電車はほとんど婦人が運転をしていた。市街の外れには高層のアパートが多く、屋根にはテレビのアンテナが林立している。離宮の公園の中には魔法の噴水が2、3ヶ所あり、何でもない所を通りかかると、急に傍の草花や地面から水を吹き出す仕掛けがあり、案内者はわれわれに知らせずにそこに連れて行ってわれわれを驚かせて大喜びをしていた。散歩に来ている子供達も大喜びで遊んでいる。何となくきゅうくつに思っていたソ連にもなかなかいたずら好きがいるものである。

ある夜、郊外のキーロフ島にあるスタジアムにおける野外パレーに案内された。平和友好祭の予行の由にて、約10万人を入れるスタンドの一方と、場内の3ヶ所に舞台が特設され、5万人ほどの市民が陸続とつめかけて来る。緯度の高いこの辺ではなかなか暗くならず、21時頃薄暗くなったところで、スタンド上の探照灯が舞台を照明して、また各舞台の縁にも赤、緑とりどりの電灯が点滅して非常に美しいなかにパレーが開始された。大舞台における白鳥の湖を主とし、その前後に各舞台でワルツその他の美しい旋律に合わせて美事な踊りが繰りひろげられ、時のたつのも忘れてるうちに23.30に終演となった。パレーを観賞するには少し広すぎて細かいところはわからないが、500人ほどのパレリーナが出演し、それぞれ行き届いた訓練を受けて良く呼吸の揃っているのに感心した。ホテルに帰って夕食の後就寝したが、今日のスタジアムの市民はもちろんであるが、一般にソ連の夏の夕は長く、毎夜23時過ぎまで散歩道や公園は若人達で賑わっているのに、その人達は翌日は普通の時間に出勤できるのかと心配になった。とにかく短い夏の間を思う存分に戸外を楽しもうという様子が良く認められる。

モスクワの地下鉄も立派なものであつたが、レーニングラードの地下鉄は新しいだけにさらに美事である。地下60mほどの深い地下鉄で、延長11km、駅が8ヶ所あり、各駅それぞれ異なった様式の装飾を施しクラシックな宮殿のような感じがする。もちろん地上との連絡には長いエスカレーターを用いている。(1958. 1. 21)

## 次 号 予 告 (3月号)

### 研究解説

|                               |         |
|-------------------------------|---------|
| 心無研削法について.....                | 小 川 正 義 |
| 4次元球面函数について.....              | 宮 下 政 和 |
| 溶接構造物の破壊に及ぼす応力除去の影響.....      | 末 岡 清 市 |
| 観測ロケット用気圧計としてのピラニゲージ [Ⅲ]..... | 安 藤 良 夫 |
| ——気圧計の温度補償およびバルーンによる高空気圧の観測—— | 富 永 五 郎 |
|                               | 岡 田 繁 沢 |
|                               | 金 文     |

### 研究速報

|                                   |         |
|-----------------------------------|---------|
| 超音波を利用した室内音響のエコーに関する模型実験について..... | 渡 辺 要 光 |
|                                   | 石 井 聖   |